

今回（2016 年度後期）の経済学部授業評価アンケートにおいては、実施必須科目 191 科目のうち 190 科目でアンケートが実施されており、ほぼ 100%の実施率となっている（実施されなかった 1 科目も履修登録者数が少なく、アンケート実施時に欠席者が 1 名でも発生すると実施必須条件を下回る科目であった）。

結果全体を通してみると、評価項目の 14 項目中 11 項目において 5 点尺度で平均値 4 点以上となっており、例年と同様に概ね良い評価を得ているものと考えられる。うち、最も平均値が高かったのは「設問 1：この授業によく出席した(4.60)」であり、学生が積極的に授業に参加していたことが伺える。もちろん、この点については、「元々、よく出席している学生がアンケートに答えている」という指摘も行い得る（例えば、延べ回答者数/延べ履修者数を計算すると 57.6%である）。

他に評価が高かった項目としては、「設問 3：教員は授業時間を有効に利用した(4.28)」「設問 7：教員は教室内が学習にふさわしい状態に保たれるよう心掛けた(4.26)」「設問 8：授業への教員の熱意を感じた(4.25)」「設問 10：シラバスと内容が一致していた(4.28)」等が挙げられる。これらは、アンケートに回答した学生達の出席率の高さと共に、彼らの授業に対する高評価を示すものと考えられる。

一方、評価の比較的低い項目については、「設問 6：この授業のレベルはあなたにとって適切であった(3.91)」と「設問 9：教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した(3.87)」がまずは挙げられる。この 2 項目は、大学全体及び各学部においても、評価が低くなる傾向にある。この点については、例えば設問 6 の一つの解釈としては、「当該の授業のレベルが自分にとって適切なものであるか否かの判断は、授業で扱う学問分野等についての一定以上の知見やある程度の俯瞰図を持っていないと困難さがある」とすれば、評価が他項目と比して低くなるのは当然とも言える。この観点からすれば、この設問について今回調査で「どちらでもない」が 22.9%となっているのは、「どちらでもない⇒どちらとも言えない/自分にはまだ判断できない」として 5 人に 1 人、2 割程度の学生がこの判断を留保したものとも考えることもできる。また、設問 9 については、当然のことながらクラスサイズに依存しており（例えば、100 名や 200 名の教室で発言・議論を積極的に促したらどうなるかは状況による）、そのため、比較的大講義の多い経済学部の平均値が、例えば、全学共通教育（国際センター）のそれと比して相当程度に低いものとなっているのも当然と言えば当然であろう。

また、最も評価の低かった「設問 14：予習または復習をよくした(3.49)」は、14 項目中で唯一、授業時間外のパフォーマンスを尋ねるユニーク項目であるが、例年、項目中で最も低い評価となっている。この回答分布を詳しくみると「どちらでもない」が凡そ 3 割と

なっており、この傾向は、大学全体及び各学部においても見て取れる。予習または復習をどれ位すれば「よく」したことになるのかの判断が回答者に委ねられている点と共に（つまり、「よく」したか否かの判断を3割の学生が留保したとも解釈できる）、大学の講義は、必ずしも教科書や教材に沿って毎週進行するわけでないので、「予習または復習」が設問のワーディングとして馴染むかどうかは検討の余地がある。

最後に、授業への全般的評価を示すものとして設定されている「設問 12：総合的にこの授業を評価できる」は 4.25 であり、この数値は良好なものと言えよう。設問 12 との相関係数の観点では、設問 1 の出席率との相関が殆どない点は例年の傾向でもあり中々に興味深い。学生自身の成果実感項目「設問 11：この分野の関心と学力が得られた」が 0.79 と最も高く、次いで教員の授業中の人的パフォーマンス項目群（設問 3、設問 5、設問 7、設問 8 等）が高くなっているのも例年通りである。

なお、設問 12 についても、このワーディングを言葉通りに受け取れば、全く異なる意味を持つ問い掛けとなり、この種の満足度調査に言わば「アンケート慣れ」していない学生もとりわけ 1 年次には一定数いることも推測されるので、調査項目の継続性の確保も一方ではあるが、いずれはより設問意図に沿ったものに変更する必要性を感じるころではある。